

カンボジア農村における自然災害の実態と地域のレジリアンス ーラタナキリ州ポン村を例としてー

山崎 優志

キーワード：レジリアンス、洪水、干ばつ、カンボジア

1. 研究の背景と目的

カンボジア北東部ラタナキリ州のメコン河支流であるセサン川沿いに位置する村落は、上流に位置するベトナムでの発電用ダム（ヤリ滝ダム）の建設後に、洪水時の不適切な放流操作から村全体に大きな被害に幾度か見舞われた。特に2009年には上記のような理由により甚大な被害の洪水を経験した。

本研究では、ラタナキリ州の一つの村、ポン村における生業構造を調査し、村人が洪水、干ばつなどの災害からどのように立ち直っていくか、すなわち村人のレジリアンスについて、現地調査を踏まえて探求する。とりわけ、災害として2009年9月に発生した洪水、2010年の干ばつを取り上げ、それらの災害から立ち直るために村人および政府がとった行動を明らかにすることを目的とする。

2. 研究対象地域

研究対象地であるポン村はラタナキリ州ボンサイ郡のセサン川沿いに位置し（図1）、村人の多くは農業を営んでいる。1世帯当たり1~2haの農地を有しており、ほぼすべての農地で水稲作主体の農業が営まれている。

3. 研究手法

2010年と2011年に現地調査を実施した。ボンサイ郡政府、ポン村村長、住民を対象に、ポン村に関する基礎的事項（ポン村の人口、世帯数、年平均収入、農民の生活に関する事柄）、および2009年の洪水に関する政府の対応、住民の行動、セサン川の最高水位、被害、事後策、さらには2010年の干ばつ被害、事後策について聞き取り調査を行った。



図1 ラタナキリ州ポン村の位置

4. 研究結果

2009年の洪水では、通常6mほどであるセサン川の水位が最高で12.3mまで上昇した。このとき、川沿い300~400mの範囲が冠水し、調査対象世帯のすべての農地で1~2mの水深で3日ほど冠水した。また、家屋では1mほどの水深で2~3日の冠水被害があった。水位が8mを超えたとき、洪水警報が発表されたが、連絡体制の不備により村人全員に周知することはできなかった。この洪水により、多くの世帯で米の収穫量が前年に比べて減少した。しかし、米収穫量の損失の補てんのための市場での米の購入することにより、稲作被害からの回復をし、さらに政府や住民の取り組みにより今後の洪水に備えていることが分かった。2010年の干ばつに関しても多くの世帯で米収穫量が減少したが、干ばつ被害は従来から経験してきており、稲作被害からの回復手段として米の購入を行っていたことが分かった。

5. 考察とまとめ

2009年の洪水は、その対応が確立されていなかったために米収穫量の低減、家畜・家財の損失という甚大な被害をもたらした。しかし一方で、干ばつは従来から恒常的に経験してきており、出稼ぎ、家畜・物品の販売、借金によって資金を得て不足分の米を購入するという稲作被害からの回復手段が確立されていたため、2010年の干ばつ時の稲作被害には適宜対応することができた。洪水に対するポン村住民のレジリアンスは、洪水に対する防御力の点は弱いものの、洪水への対応力や洪水被害からの回復力の点では比較的強かったといえる。地方政府や住民による今後の洪水対策の取り組みにより、将来の洪水に対するレジリアンスは強化されていくと推察される。